

2023年8月13日「覚醒して」

青戸教会

高橋克樹牧師

聖書エゼキエル書12章21〜28節、ルカ福音書12章35〜48節

私たち信仰者が神さまを待つときは、「腰に帯を締め」て「ともしび（ランプ）を灯して」「目を覚まして」待つていなさいと主イエスは言われます。ルカ福音書12章35節以下での主イエスの譬え話に登場する「主人」とは神さまのことです。これは神さまを待つときの姿勢についての譬えです。ただ、「神さまを待つ」と言っても、神さまが来られる時を待つということの具体的な状況は、単純なことではありません。

つまり、神さまが自分の人生にどのように介入してくるかを見定めなければ、「神さまを待つ」といつても、神さまが自分の苦しい状況を助けてくれる時を待つのか、それとも、神さまに出会えたと実感できる時を待つことなのか、はつきりしません。ただ神さまが来る時を待つというのでは、いつ、どのような形で神さまが来たのかを悟ることは難しいでしょう。

さて、36節を見ると、婚礼に出席していた主人を僕が待つという場面設定になっています。結婚式に出席して、余った料理を詰め合わせたお土産を片手に上機嫌で帰って来た主人は、起きて待つていてくれた僕たちに、披露宴でいただいたお土産を、僕たちに再分配しようとしています。

さつきまで来賓として仕えられていた主人が、自宅では僕たちに仕えるのです。主人は披露宴でいただいたご馳走を僕たちと分けたくてしようがありません。「誰か起きて待つていてくれていたらいいな」とワクワクしながら帰宅しています。

うれしい時には、共に喜んでくれる人が欲しいものです。皆が寝静まった暗い家に帰ったら、私たちはがっかりします。だから、誰かが起きて待つていてくれた場合、主人は小躍りして「幸いなるかな」と、僕たちに声をかけ、普段とは違って僕が主人になるという逆転が起こるのです。

この逆転が人生に起こるとき、私たちは神さまが自分の人生に介入してくださいと喜びとして受け止めることになるのです。例えば、私たちが教会に来た時のことを考えてみてください。順風満帆であるときに、神さまに救いを求めるようなことをする人はほとんどいません。70周年記念誌で、多くの方が教会に来るきっかけを書いておられますが、それは、人生での苦しみや、悲しい出来事に出会ってしまったことで救いを求める気持ちになつて教会に来られた場合が決定的に多いのです。

普段、私たちは主体的に生きる道を選択しながら暮らしています。それが普通の生活態度です。けれども、いったん、自分の思い描いている道筋を阻害するような出来事に見舞われると、不全観を抱いてしまい、生きることが苦しくなります。自分の思い描く人生を生きていると思つているときは、自分の意志が自分の人生の主人であるかのように考えて自分の人生を顧みるようなことはありません。

ですから、自分の意志を阻害するようなものに出会ったときは、その疎外要因を自分の思い通りにしなければならぬ僕のように受け止めてしまいます。ところが、自分の力でどうすることもできない事態に直面すると、自分が逆に運命の僕になってしまったかのよう受け止めてしまいます。疎外要因をコントロールしたいのに、コントロールできないからです。

けれども、実は、自分の思い通りにならない事態に直面することで、私たちは自分を超越する存在としての神さまに出会うのです。この世的に不幸で、避けて通りたい出来事に出会うことで、神さまが自分の人生に荒々しく介入して来て、それまでの自分の意志が自分の人生の主人であるかのような前提が崩されるのです。

この自分の意志が自分の人生の主人であるかのように振る舞っている生き方が、問い直される事態が、自分の意志が疎外された時に起こるのです。生きることが苦しく、悲しい感情に支配されてしまっているときに、腰に帯を締めるようにして、その苦しみに背を向けずに向き合うことが求められるのです。

そして、どのような事態が自分に起こっているのかをともしびを灯して冷静に見守ることです。自分の苦しさに感情的に支配されていると、苦しい感情に心が支配されてしまつて、冷静に自分の現状を見守ることができません。冷静に自分の現状を見ると、自分の思い通りにできない事態がどうして起こっているのかが見えてきます。そして、それまでの自分の意志だけを最優先して生きてきた自分の本当の姿が浮かび上がってくるのです。

それはすべての生きとし生ける者を創造している神さまの意志が、今の自分が出会っているアクシデントに対してどのように生きよ！と導いておられるかという声が聞こえてくるのです。この時、私たちは神さまに出会わされているのです。自分の意志を阻害するでき音に出会ってみて、初めて私たちは自分の意志を越えた神の意志に出会わされるのです。この神さまの意志に出会わされたとき、目を覚ましていなければならぬのです。

私たちが教会に救いを求めてきた最初の時、それまでの自分の意志を優先して生きてきた中で、見失っていた自分自身の本当の姿を見出すのです。自分の人生を自分の力で切り拓いていくことが主体的な自分の生き方だと思いついていた自分の愚かさに気づかされ、神さまの意志が、今の自分に欠けているものを明らかにしてくれることに幸いなるかなと同意することができるように導いてくれるのです。そこに本当の意味で神の意志に覚醒した自分が生まれるのです。

苦難の中にある自分を助けてくださいと祈ることは大切なことです。けれども、その姿勢が以前の自分の姿、つまりは自分の意志が自分の人生の主人であるのと同じ姿勢で神さまと対峙しているのなら、神さまは自分の願望をかなえる装置でしかありません。そこに神さまと出会わされる自分は生まれません。